

国際貸借論をめぐる諸学説

小林 通

はじめに

一般に国際間で貿易が行なわれることによって、その当事国間にあつては必然的に貸借関係が生じることになることは自明である。しかしながら、国際貸借 (balance of international indebtedness) の各項目が、悉くただちに受払いの対象とするものではない。中には数ヵ月後また数年後にはじめて受払いされるものもある。現実に受払いされるべき勘定は、国際収支 (balance of international payments) の勘定である。国際貸借は国際収支と同義語として解釈される場合が多いが、これらの二つは概念上区別されるべきものである。

すなわち国際貸借とは、一国が他の諸国に対して有する一切の対外資産負債の残高をある一定時点において捉えた概念である。それは「ストック」としての性格を意味している。換言すれば、ある時点において財貨やサービスの輸

出によつて受取る債権を「貸」として、財貨やサービスの輸入によつて生じた債務を「借」として綜合し対照したものである。国際収支とは、一国経済が一定期間（通常一カ年間）に亘る他の諸国との間の対外収支状況を明らかにしたもので「フロー」の概念で捉えられるものである。以上のように、国際貸借と国際収支との関係は国際貸借が原因であるとすれば、後者のそれは結果となるものである。⁽¹⁾このように国際間における貸借関係は、そのまま貸借に対する為替の需給状況の変化から為替相場の決定や変動原因を導き出すことができる。すなわち、それは、国際貸借説 (theory of international indebtedness) と呼ばれている。

一般に外国為替に関する学説は、その中心とする課題が、外国為替相場がどのように決定され、また変動する諸原因が何かを追求し、明らかにすることが中心となっている。外国為替相場の決定は、一般の商品価格が市場においてその需要と供給関係によつて変動したり、また決定したりすると同様に為替に対する供給と需要が直接的な要因となつて相場が変動したり決定するのである。この点外国為替変動の原因および決定の起源と進歩の時代となつた一六世紀に、さらに第一次世界大戦後半に起源をもつ近代的外国為替理論においても十分に共通するところであるが、為替に対する需給がいかなる要因によつて影響され、またその正常な相場となる帰着点は、どこになるのかの観点に於いて学説が相違することとなる。もちろん、その相違は、時代的な背景によつてかなり条件が違つてくる。

外国為替理論は、外国為替変動の要因および結果と経済制度についての分析という意味では、スコラ学派の論者、政府の経済専門家、商人などによつて既に一六世紀、一七世紀および一八世紀の間に生成、発展したものといわれている。P・アインチヒによれば、例えばそれは、(1)投機または「陰謀」理論、(2)貿易収支説、(3)貸借差額説、(4)正貨現送点メカニズムの理論、(5)物価に対する為替相場の影響に関する理論、(6)需給説、(7)数量説、(8)購買力平価説、

(9) 交易条件説、(10) 利子説などとされている。⁽²⁾ これらの中の古典的な国際貸借説・購買力平価説・為替心理説などは、その後の為替学説の有益な基盤となっている。特に国際貸借説は、為替相場成立の要因、変動過程を分析するうえで、国際間の取引である輸出入において発生する貸借関係がその決済方式として外国為替を用いることになるとして、一六世紀中葉からの貿易全盛期であった重商主義時代以前から、その中心課題として捉えられていたものである。

(1) 拙著『外国貿易論』高文堂出版社 平成元年、一〇二―一〇三頁。

(2) Paul Einzig, *The Theory of Foreign Exchanges*, 1962. P.139. 小野朝男他訳『外国為替の歴史』ダイヤモンド社、昭和四〇年、一六二頁。

重商主義期の為替論

重商主義時代は、それ自体の性格上概念解釈の相違はもとより、時代的分起点においても一六世紀中葉から一八世紀中葉期の約三〇〇年の期間として捉える場合と時代的发展段階の相違する欧州各国において出現し形成された新経済体制としてのその政策的特徴をすべて包含するとして、その時代をさらに広義の意味で捉える場合とがある。⁽¹⁾

重商主義時代以前の二三世紀以来ヨーロッパ全土におけるイタリア系銀行家たちの金融ネットワーク市場と比較して、非常に貧弱であったイギリス金融業者たちのそれは、ロンドンとアントワープという市場のみでしか羊毛と毛織物の輸出取引を行なえなかったイギリス貿易商人と呼応して、ロンドン市場においてポンド・スターリングの相場を

高値にシフトさせる為替政策を行い、またそのための理論はグレシャム (Sir Thomas Gresham : 1519-79) において既に見出せるとされている。そして為替の出現は、イギリスでの第一次エンクロージャーの進行後、輸出と関連した商人や産業資本層の急速な台頭が、旺盛な資金需要をもたらし商売上で貨幣の欠乏が足枷となった。当然のように、それは、その需要を満たしそれに代わるものの出現によって補われなくなかった。これは、正に信用創造としての為替の形態であった。⁽²⁾

これらを背景に一七世紀初頭において、当時の実務経済学者たちの間で貨幣、為替、外国貿易に関する論争が展開された。重商主義時代の経済的特徴は、一六二〇年代初期において、イギリスでは金銀の海外流出が増加したため通貨不足が深刻化し、それが原因となって国内の不況の原因とされた。事実そのことに関してさまざまな考え方が現れてきた。⁽³⁾

それはジェラルド・ド・マリーンズ (Gerrard [Gerard] de Malynes [Malines] : fl.1586-1641)、エドワード・ミッセルデン (Edward Misselden : fl.1608-54)、トーマス・ムン (Thomas Mun : 1571-1641) などであった。⁽⁴⁾ 例えば、マリーンズは、金銀の流出原因をイギリスの為替レートの過小評価であるとして、そのため、輸入財が高価になり反対に輸出財が安価となって、その結果貿易上の収支が逆調となると考えた。またマンやミッセルデンは、わが国の財宝を運び去るのは、為替におけるわが国の貨幣に対する低い評価ではなくて、わが国の貿易の不足額であると考えた。すなわち貿易上の輸出と輸入とにおける順バランスが崩壊することが不況の原因としたのである。

(1) W.フェルナーは、「その時代をトマス・アキィナスと一八世紀末葉の英国産業革命との間の時代にはさまれる五〇〇年の

期間の後半期に当たっている」といふ事。(Cf. William Fellner, *Emergence and Content of Modern Economic Analysis*, 1960. The McGraw-Hill Book Co., Inc., N.Y. pp.28-30. 松代和郎訳『近代経済分析―その発生過程と内容―』創文社、昭和四三年、二六―三八頁参照)。

(2) 森本義輝「トマス・グレシャム論の進展」『秋田経済大学論叢』第一五号別冊参照。

(3) 一七世紀初頭のロンドンの輸出貿易については、F.J. Fisher, 'London's Export Trade in the Early Seventeenth Century', *The Economic History Review*. second series, vol.III, No.2.を参照。トマス・グレシャムについては、H. Buckley, 'Sir Thomas Gresham and the Foreign Exchanges', *The Economic Journal*, vol.34, 1924. F.W. Fetter, 'Some Neglected Aspects of Gresham's Law summary', *The Quarterly Journal of Economics*, vol. XLVI, 1964. を参照。

(4) 経済的時代背景を取り入れながら当時の為替論争を取り扱ったものとして、山之内靖「イギリス市民革命期における為替論争の経済的背景」『土地制度史学』第九号、お茶の水書房、一九六〇年、二二―三九頁を参照。これら三人についての理論比較は、Cf. Terence Hutchison, *Before Adam Smith The Emergence of Political Economy, 1662-1776*. Basil Blackwell Ltd., 1988. pp.12-24. 拙著『国際分業論前史の研究』時潮社、平成九年を参照。

(1) ジェラルド・マリーンズの為替論

ブリオニスト (bullionist) としてのマリーンズの為替論は、その消極的な貿易観、すなわち、「(国家は一大家族以外の何ものでもない)、しかも君主は、(その家長である)、彼の王国と他国との貿易や通商において、ある種の平等を維持して、国内商品に対して外国商品が、オーバー・balancing (overballancing) しないように、すなわち販売する以上に購入しないようにしなければならない。なぜなら、それによって君主の財宝と王国の富とは減少し、いわば彼の支

出は比較的大きくなり、所得あるいは収入を超過するようになるからである」⁽¹⁾ことに依拠しているように思われる。

彼は、国家の地金銀や貨幣などが流出することによって、ますます国富が減少するのは、国際取引上における交易条件の悪化に基づく国際収支上の逆調を来たすことを指摘した。「この王国の富は、正に三つの方法以外には減少するものではない。すなわち、(二つ目は) 国外へ現金や地金を流出することによって、(二つ目は) 国内商品をあまりにも廉価で販売することによって、また (三つ目は) 外国商品を余りに高価に買い入れることによってである。そして主としてこの点にオーバー・balancingが存在するのであり、それが不均衡の原因であり、われわれは結局それと交換に外国財貨を獲得するために、貨幣と財貨との二つを与えるのである」⁽²⁾としている。

地金銀や貨幣が国外へ流出することは国富の減少を意味し、それは貿易上の交易条件悪化が原因であるとする。換言すればそれは、イングランドにおけるすべての貿易衰退の原因が、貨幣不足に結果するものであると同義語となる。さらに彼は、為替手形による低い為替相場によって生じたわが国の正金の運搬というような、貨幣・地金銀の国外流出には為替によるという限定が介入してくることになるとしながら、貿易衰退の原因として為替手形によるわが国の貨幣の低評価、それに対する外国鑄貨の高評価を挙げている。⁽³⁾

ところでマリーンズは、貿易に関連して最も重要な地位を為替に与え、「地金銀が泉であり、貨幣は水に過ぎないが、為替は総ての個人の利益にサービスする川である」⁽⁴⁾として為替を大きく評価している。本来為替は、「貨幣の現送を避けるために、等価値に従って各国の貨幣の量目、純分、価値付けを基にして考案されたものである」⁽⁵⁾として、外国為替の本質を次のように展開している。それによれば、わが国と外国との間のすべての取引における財貨、貨幣、外国との手形による貨幣の交換(すなわち外国為替)が、人間の基本的な三つの部分である身体、心、精神にそれぞれ

置き換えることができる。そしてその中で外国為替は、精神および心の機能として働き、財貨、貨幣の価格や価値を支配しコントロールして、取引の活力を強化するものであると論及する。⁽⁶⁾

そして貨幣が最も純粋な金属である金・銀から、国内における一切の財貨やその他のものに価格を与える標準尺度として鑄造されるように考案され、そのため共通の尺度と呼ばれるに至った貨幣と同様に、貨幣の交換である為替は、わが国と外国との共通の尺度であるといえるものである。⁽⁷⁾

また同様に「時計の場合では、多くの歯車があつて、その最初の歯車が動かされて、第二番目を動かし、それが第三番目の歯車を動かし、こうして最後に、最後の第四番目の歯車が時刻を打つ器具を動かすのである。為替においても同様である。なぜなら貨幣が考案されて財貨という歯車を刺激し、それを動かす最初の歯車となった。しかし国際間の貨幣の為替という歯車は、時計の時を打つ器具に似ている。そこにおいては、為替が能動的なもの (active) であり、財貨、貨幣は受動的なもの (passive) となる」⁽⁸⁾とも述べている。

この点で考慮すると、マリーンズにおける外国為替論は、貨幣の購買力と貨幣価値と同一視する理論である素朴な購買力平価説と称される向きがある。⁽⁹⁾ それは、スチュアート治世の初期にイギリスがその被害を被っていたすべての経済的紛争の責任を投機的業者に負わす理論を打ち立て、科学的根拠を与えようと努めたことに関連しており、マリーンズが為替の諸操作に関して、意図的にもつと言えは故意的に叙述したことで裏付けられることは確かであるとの考え方からである。しかし、これは、マリーンズが為替の理論と国際貿易の理論との表裏を取違え、問題を置き換えた点があり、それは大いに問題とされるところである。というのは、当時の経済発展段階での経済構造がまだ十分発達できてはいない生産過程があり、そこから国富 (GDP) を獲得できるようにはなっておらず、まだまだ流通過

程からのみからの国富 (GDP) の増殖に依存していた時代であつたはずである。当然のように輸入を制限し輸出を奨励しなければ富の流入は期待できない。マリーンズのように、富である貨幣 (金銀などの貴金属、地金) の減少につながる海外流出を防ぎ、海外からの貨幣の流入をもたらしようとする政策は当然であつたと思われるが、極端な輸入禁止令やそれに関連する一連の政策のすべては為替が先行しており、本来の貿易を繁栄させ国内の富を増加させようとする考えが第二次的なものとなっている。そのため、貨幣数量説の貨幣数量の減少→国内物価の下落→自国貨幣の購買力の増加→為替相場の上昇という展開から為替の悪用→貨幣流出→国内物価安 (外国物価高) →貿易のオーバー・バランスという図式が描かれた。マリーンズは、揶揄すれば「為替平価」こそが真の「バランス・オブ・トゥレイド」であつたのである。

この理論は、三つの「M」——一方ではマリーンズ、他方ではミッセルデンとマン——の間の外国為替史における最も重要な論争の一つの出発点を提供した。マリーンズの二人の反対者たちは、正貨の損失が貿易収支の逆調によるものと主張した。⁽¹⁰⁾ 結局ブリオニストとして代表されるマリーンズは、ヨーロッパ全土におけるバンカーたちによる諸処での為替における悪用が、イギリス商品の外国商品に対する相対的低位をもたらし、その結果の交易条件悪化にリンクし国外への貨幣流出となり、貨幣不足となると結論する。⁽¹¹⁾

(1) Gerard de Malynes, *A Treatise of the Canker of Englands Common Wealth. Devided into three parts : wherein the Author imitating the rule of good Physicians, First, declareth the disease. Secondly, sheweth the efficient cause thereof. Lastly, a remedy for the same.* London, 1601. pp.2-3. The English Experience, Number880. W. J. Johnson, Inc. 1977. 21

Canker と略称。

(2) Malynes, *Canker*, pp.3-4. Cf. P. J. Thomas, *Mercantilism and the East India Trade*, Frank Cass&Co. Ltd 1963. またリーネズの時代は、その他の当時の経済著作者以上にスコラ学派から重商主義への過渡期であり、彼がその時代を代表していたということを考慮すれば、マリーネズの経済理論の根幹に常にスコラ学派的理論が存在していたことには異論の余地はないだろう。(Cf., M. Beer, *Early British Economics from XIIIth to the middle of XVIIIth century*. London. G. Allen&Unwin. 1938. pp.130-131.) 例えばマリーネズは「流通（交換）的正義（Commutative Justice）は交易を包含するものであり、それは平等を公正という手段によつて王国や国家を富ませる唯一の平穏な手段である」(Gerard de Malynes, *Consuetudo, Vel Lex Mercatoria, or the Antient La-Merchant Divided Iudges, Magistrates, Temporall and Ciuile Lawyers, Mint-man, Merchants, Mariners, and all others negotiating in all places of the World*. London. 1622. P.A. 3. 1979. The English Experience, Number940. W. J. Johnson, Inc. 1979. 以下 *Lex Mercatoria* と略称) と述べている。

(3) Cf. *Maintenance*, p.77 ; *Lex*, p.45. pp.329-330 ; *Center*, p.44.

(4) *Canker*, p.139.

(5) *Ibid.*, p.14.

(6) *Maintenance.*, pp.2-3.

(7) Cf. *ibid.*, pp.3-4. James W. Angell, *The Theory of International Prices History, Criticism and Restatement*. Reprints of Economic Classics Augustus, M. Kelley Bookseller 1965(reprinted) pp.12-13.

(8) *Ibid.*, p.6.

(9) J. A. Schumpeter, *History of Economic Analysis*, p.737. 東畑精一訳『経済分析の歴史』岩波書店、一五四四頁参照。

(10) ミッセルデンの場合には、平価切下げによつて阻止されることができ、また阻止しなければならないとしていたのに対して、マンの場合には、鑄造貨幣の価値の変更が他の手段によつて改善されねばならない貿易収支には影響しないだろうという静態論を採用した。Paul Einzig, *The History of Foreign Exchange*, Macmillan. 1962. pp.143-144. 小野朝男他訳『外国為替の

歴史』ダイヤモンド社、昭和四〇年、一六八頁参照。

(11) マリーンズは、自国貨幣の再評価その管理、さらには公的独占の確立を提案し、東インド会社の活動を批判したが、それはある意味では、彼が奢侈品の輸入やイギリス製品と競合するような商品の輸入に対して危惧していたからではないかと考えられるところもある。

(2) トーマス・マンの為替論

一七世紀初頭において支配的であった重金主義（ブリオニズム）は、貿易が世界的規模にまで拡大するにつれて弔鐘が打ち鳴らされ、これに代わってトーマス・マンが主張した貿易差額説（バランス・オヴ・トレード論）が台頭してきた。トーマス・マンは、イギリスの東インド会社の重役という立場から東インド会社を弁護して、一国の総輸出が総輸入を超過する状況であるとすれば、富である貨幣（金銀）は必然的に国内に流入し、それが増大するという一般論を導き出したのである。⁽¹⁾ また特にこの時期は、イギリス毛織物工業にとって海外の消費地での嗜好や流行の変化によるその国際市場における競争力の低下、白地広幅織の輸出減少などが、イギリス商人にこれまでに観られないほどのダメージをあたえていた。そして同時にこの不況は、国民経済全体の一般的不況の様相をすら呈してきた時期でもあった。⁽²⁾

トーマス・マンは、貿易上の差額が単に商品の輸出入に関する差額を意味するだけでなく、国際間の全支払差額も包含し、国際収支上見える取引（visible trade）としての貿易収支と同一視するのではなく、見えざる取引（invisible trade）としての貿易外収支・サービス収支などを含めたものとして国際収支を捉えていた。

この貿易差額説の上に立つて、マンは、外国為替に関する本質を次のように論述している。「わが国の貿易上の差額は、超過を示すか不足を示すかによって実際に貨幣が潤沢になったり不足したりする。一国内における貨幣が潤沢であるか不足しているかによって、すべての財貨があるいは高くなりあるいは安くなるように、それを交換する上では常に反対の作用がなされるのと同様に、為替相場においても同じ作用が見られる。すなわち、貨幣が潤沢であるか不足しているかによって、為替の価格が高められたり低められたりするのである。為替は、貨幣のそれぞれの量目と純金に応ずるところの等価によって契約されるものではない。すなわち第一に、貨幣を引き渡す人は債券に伴う危険と忍耐期間を顧慮するからであり、しかも為替で貨幣が安価にあるいは高価に評価せられるのは、為替が組まれる場所における貨幣が贅沢であるか不足しているかによる⁽³⁾」と論及している。

すなわちマンによれば、本来外国為替は、貿易の輸出入における決済に際してその手段として作用するものであり、これは手形による貨幣の為替取引のみを業務としている商人は、わが国に財宝を増加することも減少することもできないのであると捉える。すなわち彼らは、単に為替の専門業者として自分自身の利益目当てに為替に従事するのみで商品を輸入しなければ、輸出もしないことになる。「国内もしくは海外でわが国の貨幣が為替手形によって授受される場合、その評価が過少であろうとも我が国の財宝を減少せしめることはありえない。手形による商人の為替というものは、ある国に貨幣を所有している人が、それを引き渡し、同意をみた特定の日時と相場で、別の国で再び受取ることができるようにする一手段であり、慣行であつて、それによって貸手と借手とは便宜を受け、国から国へと金銀を搬送する要がなくなるものである⁽⁴⁾」

マンは、わが国の国富である貨幣が流出する際に、為替に対する評価がどのように影響するのかについて、「わが

国の財宝を運び去るのは、為替における貨幣に対する低い評価ではなくて、わが国の貿易の不足差額だということであり^⑤、「為替においてわが国の貨幣が低く評価されるということとは、ある人々（これはマリーンズを指す、筆者）の憶測とは違い王国外に貨幣を運び出すものではなく、むしろ平価で行なわれる場合よりも貨幣の輸出量を少なくする一手段であるということ^⑥」になる。それは外国人の損失となるがわが国にとって利益となると論及する。

マリーンズは、「為替こそ貿易の本質的要因であるとし、能動的で優越的であり、商品と貨幣の価格を制圧するものであり、生命であり精神であり、また驚くべき諸操作の遂行者であるとしている^⑦」が、これらの奇跡がいかにして引き起こされるかについて、全く言及していないとマンは捉えている。

マリーンズは為替の悪用が廃止されれば、イギリスにとっては多くの利益が生まれることを考慮していたと思われる所がある。すなわち、「この為替の流れが悪用され、この所それは、貨幣の多寡、時間の隔たり、場所の違いに従って、価格における上下の変化を起こす取引となってきた。それは、財貨と貨幣の流れを支配し統制するようになり、そしてそれは、正に財貨のオーバー・balancingになり、その結果わが富の減少やわが貨幣の搬出の根本原因となった^⑧」として、銀行家たちによって、為替相場の変動が生じれば、それが貨幣や地金銀が流出していく原因となると捉えた。このように為替の悪用阻止は、貨幣の流出を防止し、国内財貨を割高に販売し、外国財貨を割安に購入できることによつて、オーバー・balancingが阻止できるものと考えた。本来この点は、マンの展開のように国富の増加を流通面から捉え、それを生産面で素朴ではあるが国内の生産過程の循環の中で、富の形成があつてから始めて論述される問題である。その点ではマリーンズの思考は、一面的であつたといわざるを得ず、それは当然マンの批判に繋がつたのである。

- (1) 当時海外、特に東インドへの貨幣（金銀）の流出したことに對して、マリーンズ達の非難の聲が起こり、世論への影響も拡大した。これに對してマンは、一六二二年に『イギリスの東インド貿易に關する一論』（*A Discourse of Trade, From England unto the East-Indies : Answering to diverse objections which are usually made against the same.* 1621）を著¹⁾、またジェームズ一世時に設けられた貿易常設委員會の委員として、東インド会社を弁護し反對者を沈黙させた。
- (2) 船山栄一「イギリス貿易の構造変化」『社会経済史学』vol.37-1、昭和四六年、五—二七頁参照。
- (3) T. Mun, *England's Treasure by Foreign Trade. Or, The Balance of our Foreign Trade is the Rule of our Treasure.* 1664 pp.39-40. 渡邊源次郎訳『外国貿易によるイングランドの財宝』東京大学出版会、一九七一年、七二頁。
- (4) *Ibid.*, p.39. 邦訳七一頁。
- (5) *Ibid.*, p.41. 邦訳七四頁。
- (6) *Ibid.*, pp.41-42. 邦訳七五頁。この点に關してもマンは、「王国を富ませもし貧しくさせもするこの重要な作用が、何ゆゑに為替に歸せしめられるべきなのか。それは、わが国の外国貿易を受取差額にしたり支払差額にしたりするところの諸手段によつてのみなされることを既に明らかにしたことである」(*Ibid.*, pp.41-42. 邦訳七五頁)として、「貿易こそ支配的であり能動的なのであつて、為替の価格をあるいは高めあるいは低めるのであり、したがつて為替は受動的なものである」(*Ibid.*, p.49. 邦訳八七頁。)と述べている。
- (7) *Ibid.*, p.55. 邦訳九七頁。
- (8) *Canker*, pp.15-16. 一六世紀初期以來においては經濟事情が不安定なところがあり、国富を維持増大する上で、為替に對する見解はほぼ一致しているところがある。例えば、「(マリーンズは、)貨幣売買為替なる癌 (*canker of merchandizing exchange*)こそイギリスの未知の疾病の原因であると断じ止まなかつたのである。このような為替觀は、一六世紀以來、クレメント・アームストロング、トーマス・グレシャム、トーマス・ウィルソン、マイルズ・モス等、イギリスに置いてほぼ一貫して主張されてきたところであるが、マリーンズに至つて絶頂に達したといつてよいであらう」(渡邊源次郎『イギリス初期重商主義研究』未来社、一九五九年、一七九頁。)

J・S・ミルの為替論

広義的視点に立てば、外国為替の本質は、遠隔地間の債権債務の関係を貨幣（金）などの現金を用いずして、手形などの取立支払指図書によって決済する方法であると認識されている。古代から中世においては、外国為替は、硬貨の取引をその中心とした小口為替と考えられていたが、次第に手形による為替である証券為替が、当時の貨幣取引の専門家やバンカーにとって関心が増大していった。国際間での輸出入における貸借関係を古典学派においての為替論は、どのように捉えられていたのであろうか。

古典学派の一人であるJ・S・ミルは、為替の必要性や役割について次のように述べている。それによれば、「ある国の種々の輸出品と輸入品とは、ひとり互いに直接に交換されないばかりでなく、多くの場合は、同じ人の手を通りさせもしないものである。それぞれのものが、別々に購入され、貨幣を持って支払われる。しかし同じ国のうちでさえも、貨幣は、既に見たように貨幣を持って購買がなされるたびごとに、実際に人の手を転々するものではないが、このことは、相異なつた国々の間ではなおさらそのとおりである。国と国とのあいだにおいて、諸商品に対する支払を授受する普通の方法は、為替手形によるものである。」^①として、国家間の輸出入に取引において貨幣を用いることなく決済が可能に成るとしている。

またかれはさらに為替の原理について非常に明快に説明している。例えば、「今イギリスの一商人甲が、フランスにおける彼の取引先乙へあててイギリスの商品の販売を委託することによって輸出した。またフランスのもう一人の商人丙が、イギリスの商人丁へ、フランスの商品（相等的価値のものだと仮定しよう）を輸出したとする。この場合、

フランスの乙がイギリスの甲へ向つて貨幣を送り、イギリスの丁がそれと同じ金額の貨幣をフランスの丙へ向つて送る必要は、明らかにないのである。一方の債務を他方の債務の支払に充当し、このようにして二重の輸送の費用および危険を避けることができる。甲は、乙に当てて、乙が彼に借りている金額だけの手形を振り出す。丁は、フランスでこれと同じ金額の支払いをしなければならないので、この手形を甲から買い取つて、それを丙に送る。丙は、この手形がその後経過しなければならぬ日数が満了したときに、それを乙に呈示して支払いを求める。このようにして、フランスからイギリスへ支払われなければならぬ債務と、イギリスからフランスへ支払われなければならぬ債務とが、ともに一方の国から他方の国へ一オンスの金あるいは銀を送ることもなしに支払われるのである。⁽²⁾

これらの取引は、国家間相互において輸出と輸入とが互いに過不足なく相殺し合つており、本来の通商から生じる支払い以外の一切の国際的支払いを除外している国際的需要の方程式というべき通商の形態が確立されている場合である。すなわち、国際取引上の実需筋の場合には、当然のように国際的取引は、一つの国から他の国への貨幣の移動を何ら伴うものではなく清算されるのである。しかしながらどちらかの国が他国よりも債務に関してその額が大きかった場合には、その差額は、貴金属（金・銀など）を持つてこれを送金しなければならない。もちろんこのような場合、手形を持つてこれに対する支払いをすることになる。⁽³⁾

また為替の平価について J・S・ミルは次のように述べている。すなわち、「イギリスがフランスに対して支払わなければならない金額が、フランスから受取るべき金額よりも大きくなっている場合には、貨幣を受取るべき人たちが振り出す手形よりも、フランス宛の手形を必要としている人たちの求める手形の方が、ポンドの数が大きくなるであろう。このような場合、プレミアムがついているといわれるであろう。このプレミアムは金を持つて送金する場合の費

用および危険に、些少の利潤を加えたものを、越え得ないであろう。けだしもしもそれを越えたとすると、債務者は、手形を買い入れるよりも、むしろ金そのものを送るであろうからである。⁽⁴⁾「またこれと反対の場合には、これと逆になり結果として手形の価格は平価以下に下落することになると論述している。

- (1) J. S. Mill, *Principles of Political Economy*, (Collected Works John Stuart Mill, III, University of Toronto, 1965) p.622. 末永茂喜訳『経済学原理 (三)』岩波書店、二二二頁。
- (2) *Ibid.*, p.624. 邦訳二二二～二二三頁。
- (3) *Ibid.*, p.624. 邦訳二二三頁。
- (4) *Ibid.*, pp.625-626. 邦訳二三五頁。

ゴッシェンの為替論

国際貸借説 (theory of international indebtedness) は、G. J. ゴッシェン (George Joachim Goschen : 1831-1907) が J. S. ミルやカンティロンらによつて個々に述べられていたものを体系的に総合し、打ち立てた為替学説である。国際貸借とは、国際間におけるさまざまな取引によつて生じる「貸」「借」であり、当然のようにそれらは決済されるべきものである。しかし一般的に貨幣（金、銀）を用いての決済は、そこに発生する様々な要因によつて、たとえば現金を取り扱う上での危険度、運搬費用、手数などが負担費用と成つて掛かってくる。そのために外国為替による決済が行われるようになった。ゴッシェンによれば、国際貸借は、重商主義者達の経済的思想として考えられていたように、

単なる貿易上の差額を意味するのではないことを指摘し、国際間の債務の本質を解明しようとしたのである。それによれば、「これらの負債を単純に外国品の輸入によつて生じると想定し、そして貿易バランスを単なる輸入と輸出の問題として、すなわち一方の他方に対する超過であると見直すことはしばしば誤謬である。∴その債務は、国々がそれぞれの生産物の交換の結果であつて、天産物と製造品の支払いか、または株券と公債の購入のためか、あるいは利潤、手数料、または何らかの貢納支払いのためか、もしくは外国での移住や旅行に要した費用を代弁するためにあつて、事実上それぞれの国家相互間に行なわれる一切の支払額（あるいは支払いの約束）から起こることが明らかになるであろう。現実に借入をすると言う観念は取り去られねばならないし、今われわれに關係のあるのは負担する債務であつて、しかもこの債務はその起因が何であろうと結果においては同一である^①」と述べている。

すなわち、彼は国際貸借の意味を広義的なものとして捉えて、すなわち、第一、生産物および製造品の取引である見える貿易取引 (visible trade)、第二、株券および公債の売買、第三、利潤、運賃、手数料または寄付金の支払い、第四、外国移住者の消費、外国旅行における消費などを挙げ、単に貿易収支のみにより構成されるだけでなく、見える貿易取引 (invisible trade) である貿易外収支を包含しそれぞれが国際貸借に影響を及ぼすものとしたのである。

さらに彼は、為替相場の決定要因およびその変動を国際間における国際的貸借關係であるとして捉えており、そのため国際貸借に関して次のようにも論述している。すなわち、「二国間の相対的債務あるいは貿易のバランスの話ができるときには、一方の国が他方の国に負う永続的な負債は、少なくとも支払いの時期が到来するまでは考慮にない。貿易のバランスは決済されねばならぬ取引に依存するが、しかし双方の合意で多年にわたつてそのまま停止状態にある取引には依存しない^②」とするものである。国際間に貸借關係が存在しても、それが支払いされぬ以上、すな

わち、一定の期間における収支だけが為替相場に関係してくるというのである。彼によれば、「たとえば合衆国はイギリスの所有者の手の中にあるアメリカ証券という形でイギリスに巨額の負債はあるが、しかしこれらの有価証券に対する利子を除いては、この固定貸借 (consolidated indebtedness) は清算を必要としないので、その流動貸借 (floating indebtedness) にはほとんど何の影響も与えないが、この流動貸借のバランスによつて二国間の為替の変動は決定される⁽³⁾」と述べている。

すなわちゴッシェンによれば、国際貸借は、いまだ取引の決済段階に至らない貸借としての固定貸借とすでに取引の決済段階に至っている貸借である流動貸借とがある。為替の変動や決定は、この後者の流動貸借による為替に対する需要と供給状況がどのように現れるかによつてなされるものとするのである。

また外国為替相場の変動における騰落はどのように惹起するのかについて、その原因を「外国へ資金を送金しようと欲する側の需要額がたまたまある時期に多いか少ないかによることである⁽⁴⁾」として、為替相場は為替市場での為替に対する供給と需要とによつて決定されるとする。そして、実際には為替に関する売買取引は、外国為替手形という一定の形をとるのであり、かかる為替手形が売買される理由は、外国との間における貸借関係が発生し、一定額を支払う必要があるからであり、外国為替を論ずるにあたつて熟慮せねばならない第一の要因は、国際貸借 (国際的債務) であるとして、外国為替論を展開していることになる。

ゴッシェンが外国為替論を論述する場合につきの前提が列挙されよう。それは第一に、金本位制度の時代を考慮していたこと、第二に、基本的には取引される相互国家の統一的貨幣制度の樹立、第三に、外国為替手形の価格が為替相場であること、第四に、標準的為替相場は、一覽払手形で短期間の価格を持つて示されること、などである。⁽⁵⁾もち

ろん、長期間の手形の価格も考慮され、利子率、信用状態、経済恐慌、政治的動乱などの場合、為替を変動させる諸要因となるとしているが、ゴッシェンにあつては、為替相場の決定また変動の原因である国際貸借は、いわゆる一覽払手形をもつて決済されるものを対象としており、それが為替相場の決定「第一の重要な要因」であるとした。そのため、彼の所説は、国際貸借説あるいは国際収支説と呼ばれている。当然この点、すなわち短期的な観点からの考察は、彼の理論の欠陥である国際貸借と国際収支の同一視があると批判されることになる。

国際貸借説をして、第一次世界大戦前、世界各国が一般的に金本位制度を採用していた時代の為替相場の決定、変動を説明しえた理由は、元来、金本位制度を採用している国家の相互間においては、為替相場の基準点は法定平価によつて与えられており、その変動の範囲も金輸出口と金輸入点との間に限られていたために、このような単純な需要供給説をもつてしても、十分に日々の為替相場の変動を説明することが可能であつたと思われる。⁽⁶⁾

(1) George Joachim Goschen, *The Theory of Foreign Exchanges*, 1861. pp.11-12. 鷲野隼太郎、高橋政夫共訳『経済学説体系

(七) 貨幣論(下巻) 第五篇外国為替論(ゴッシェン)』而立社、大正一四年。町田義一郎訳『ゴッシェン外国為替の理論』、

日本評論社、昭和四三年、一一頁。私蔵の二冊を使用したが生に後者の訳を使用した。

(2) *Ibid.*, p.16. 邦訳、一二頁。

(3) *Ibid.*, p.16. 邦訳、一二頁。例えば、流動貸借Ⅱ為替の需給のように、為替に対する需要と供給が均衡状態にある場合↓為替相場の変更なし。流動債権(為替の供給)が流動債務(為替の需要)を上回る場合↓為替相場は邦貨高・外貨安の方向に變動。流動債権(為替の供給)が流動債務(為替の需要)を下回る場合↓為替相場は、邦貨安・外貨高の方向に變動(安東盛人『外国為替概論』有斐閣、昭和三七年、三四九頁参照)。

- (4) *Ibid.*, p.5. 邦訳、七頁。
- (5) 『ゴッシェン外国為替の理論』所収の金原賢之助氏解説、一〇五～一〇六頁。
- (6) 千種義人『価格・貨幣・為替の基礎理論』巖松堂書店、昭和一七年、二八五頁。金本位制国での為替相場変動の限界は、金平価 (gold parity) に金現送費を加減したいわゆる金輸出点 (gold export point) と金輸入点 (gold import point) であるとしている。また恐慌などの経済的パニックにより為替相場が金現送点を超えて動くこともあるとする。また紙幣本位制国における為替相場変動は、金輸出入の自由な場合、金本位制国における場合と同一であるが、金輸出禁止の場合、為替に対する需給の変化によって制限なく変動することとなる (安藤盛人、前掲書、三五〇頁参照)。吉田啓一『外国為替と国際金融』泉文堂、昭和四七年、九八頁参照。